

未開封 (エピソード)

梅雨明け十日という言葉通りになりそうだと若い天気予報の女性がなぜか胸を張ったのが子どものように可愛くて笑いながらテレビリモコンのスイッチを切った。いつもの時間に目覚めて身繕いも済ませたあとベッドで横になってから既に小一時間が過ぎている。

専門医の所見を受けて余命に關してもしっかり受け止めたはずだったが、一人部屋に居ると死後の自分に懸念が出てくる。入る墓はない。気持ちを見無視してかかれれば自分は立花家の嫁なので亡夫の立派な墓に納めてもらう権利はありそうだが、それは嫌だった。「樹木葬がいいかな、やっぱり」と口にしてみる。新沼副苑長に頼めば何とかなりそうな気がするのだ。可能ならば「こだま苑」の北の雑木林の中がいい。それにしても自分はいままで生きられるのだろう。その疑問符が頭に浮かぶと思考は闇に入って一点で止まる。

「生きても死ぬも独りなのね」と。

「いつまで寝てんの、はい、起きて、起きて」

声の主、野田看護師はすぐそばに居た、入口のドアが開いたのも気づかなかったので少しく慌てた。

「はい、メールが届いていたよ、これ」

身を起こすと野田が紙一枚をヒラヒラさせながら寄越した。

「なんでわたしに？ 君のパソコンに着いたの？」

「まさか、こだま苑のアドレスにだよ、立花薫ってほかにいないからね、内容を見ても薫さんに間違いない」

受け取って差出人を確かめると「看護師奥平幸子」とあり、メール文の末尾に松葉共済病院の名と、その住所、電話番号などが並んでいた。連絡文は比較的長い。

「読むから少しここに居てね、訳わからないので」

「いるさ、バイタル採りに来たんだから」

『立花薫様』

唐突ながら亡くなられた柏原様から最後の伝言を頼まれていきますのでメールしました。

裕司さんからの伝言はこの三点でした。

一、由美とは七カ月前に離婚している

二、ただ見舞にはこの二カ月ほど来てくれている

三、僕の遺骨は慈源院の柏原家の墓に入る

以下は私、奥平の補筆です。当病院に入院時、由美さんは妻として届け出ていました。書簡の一回目から五回目までは柏原さん本人が書き、投函は由美さん。六回目の書簡は私、奥平が諸事情をしたためて投函しました。彼の便りは読まれていないと思いましたが、あなた方三人の関係その他の事情は詳しくは知らされていません。彼が残したメモ書き程度の短い言葉で立花さんはすべてお察しになれるのだろうと勝手に思つてこのメールをお送りしました。必ずご確認のほど宜しくお願いいたします。

それと、これをお読みになりましたら、「読んだ」でも既読とだけでも結構ですのでメール返信をお願いいたします。そこで初めて柏原さん担当看護師としての私の務めが完了するような気がしますので。かしこ」

「野田君、これ読んだのは君だけ？」

「だって読めちゃうだろ」

「ありがと、怒つてないよ。わたしパソコンのためだから立花は読みましたと返信してくれるかな、この看

護師さんにはあとで手紙を書いてお礼するから」

「ああ、すぐにでもやってあげるよ。とりあえずはいい、体温図る」と、気のいい彼は笑顔で体温計を寄越すとすぐに血圧を測る準備を素早く済ませた。指に挟んで測る検査は今回は要らないという。

それに応じながら三つの伝言項目が絡み合つてできた疑問符で頭の中がいつぱいになっていった。

「ねえ、朝の一回りが終わつたらここへ来てくれな
い？ 頼みごとがあるのよ、喫茶でケーキと飲み物をつけるなんて条件でもオーケーよ」

「じゃあ、喫茶で。三十分ぐらいで開放してね。それ読んだら何か行動すると思つてた、あたりだ」

「ほんとに鋭い子ね、君は」

「血圧百五十三の九十、心拍数八十八。心の乱れは数値に出てるよ、正直な薫さん」

何を頼むかを自分にも確かめずに口にした。いや、生まれた疑問が動機だと解つてはいるが。なぜ由美は離婚したのに何度も見舞に訪れ手紙を投函し、臨終に立ち会つたのか。菩提寺には一度だけ祐司について行つて場所はわかるが今更何をさせようとするのか。

「もういい加減にしてほしい」と思いつつも妙に引っかかっている。

野田は十時に戻ってきたので一緒に苑内の喫茶コーナーに向かった。田村弁護士が二人を見てクスッと笑いながら入れ替わるようにして出て行った。

「キミちゃんに頼み事じゃないってことは、車だね」
いつも先回りが好きな子だがこういうときは助かる。

「丸一日かかるけどいい？ 車での遠出」

「有休使わないと無理だな」

「当然だってお礼はする」

「あれっ、薫さん無一文になったって聞いたけど」
「バカねえ、いくらわたしでも本当の無一文にするわけじゃないじゃない、二百やそこらは確保してるわよ。そうじゃなきゃお茶したりお化粧したりもできないじゃない」

「案外しつかりしてるね、大人だ。いいけど車椅子乗せられる中型の車が要る、新沼副苑長に許可もらってね。それと詳しい事情は車中でゆっくり教えて。看護師だから守秘義務があるから大丈夫」

こうして話を進めているうちに、不思議ながら奥平看護師にも会いたくなっている自分がいた。なぜか胸騒ぎがするのだ。

詳しい事情も知っている新沼先生の許可はすぐに下りた、野田の二日連続の有給休暇も含めて。

二時間ほどで現地に着き、慈源院に入る前に近くの花屋で花束を仕入れた。五本ほど選んで束ねてもらったが野田は束を指差して「お墓にと買ったんでしょ、薫さん、それじゃあ誕生日のプレゼントですよ、どう見ても華やかすぎる」と生意気にも笑った。

「ぜんぶ故人が好きだった花なんだけど、それでも？」

店の人が納得したようであらずいた。

野田は小声で「ごめん」と言ってお頭を下げた。こういうところは可愛い。

昔一度しか会ったことはないが住職に挨拶をしようにと境内で掃き掃除をしている婦人に頼むと、すぐに取り次いでくれた。住職との短いやり取りの中で意外な言葉を耳にする。松葉共済病院の奥平看護師長から

来訪は知らされていたという。裕司のお骨は確かに両親の墓で眠っていると答えてもくれた。それは今回の目的でもある大事な確認でもあった。墓石にその旨記載がなければ分からないからだ。

「メールの人、看護師長さんだったんだねえ」

車椅子を押しながら野田が意外だと言わんばかりの調子で言った。確かに大きな病院の師長と言えれば職域のトップだろう、メールの文章が簡にして要を得ていて節度もあり、末尾が「かしこ」だったので有能で年配者だと思っただけなのだ。

「柏原家は裕福だから病室も担当看護師もね、解るでしょ、病院だつてつまるところ営業だから」

「すぐに想いがそっちへ行きましたね、薫さん」

弄(いじ)られた薫も「お僻(ひが)み根性丸出し」と返して笑った。

車椅子の薫は楽だが、坂を上り始めると野田の息がだんだん荒くなつた。

「ごめんね、あと十メートルぐらいで左折したらすぐの所だから」

そう言いながら右横のはるか向こうを眺めると、海

の水平線が空との境界を鮮やかにしていた。

空は雲一つ無く、ぬけるように青かつた

辿り着いた柏原家の墓は意外なことに荒れ気味だった。何か変だと改めて首を傾げた。残念ながら水桶も酒も持つて来られなかった。清めはあきらめ型どおりに線香を焚いて合掌をする。特別な感情は浮かんでこなかった。なにしろ半世紀以上経っているのだ。その間に熱かつた想いも冷え涙も枯れている。しかしそうならなぜ遠路をおかして墓参りに来たのか。

「ねえ裕司、裕福な暮らしを両親と由美と一緒に、それこそ平穩に続けて老いるまでずっと、それが望みだったんでしょ、それが何なの子どもも出来ず、死に至る病らしいのに離婚されて、こうして薄汚くなっている墓に入ってるなんて。人生のどこで、何に躓(つまず)いたっていうの？ はつきり言っただけあげるわ、ざまあないわね」

手を合わせたまま心の中でそう言つと、なぜか急に眼がしらが熱くなつてきた。

「涙？ なにそれ、違う！」

急に胃の腑からこみ上げるものがあつて、目の前に

置いた花束を持って立ち上がるやいなや、墓石を花束で叩き出した。

「薫さん！ まずいよ、止めな、そんなこと。かおるさんらしくない！ ダメだってば！」

悲鳴に近い野田の声に驚いて我に返った。涙が理不尽にも止まらない。頬を伝い、首筋を這うようになって気持ち悪かった。野田の顔は恥ずかしくて見られない。すぐには振り向けなかった。

「あ、薫さん、後ろに女の人が」

「薫さん、由美です、少しお話したいのですが」

なぜここに由美が？ 少し慌てて涙を拭い、ゆくりと振り返った。

「思った通りでした、半世紀以上の歳月が経っているのに二人は、いいえ、二人の心は繋がっていたんですね、いまの墓石叩きはその証です、羨ましい」

「なぜ知ってたの？ ここに来る日時まで」

「奥平さんから連絡が入りました、わたしの今の住まい、アパートがこの近くなんです」

「離婚してたなんてこの間来苑したときには黙ってたわよね、いったい何の真似なの、こう言っては失礼

だけど気味が悪いわ」

「ごめんなさい、わたしの中にも恥ずかしさはあつて」

「話つて何、わたしたちすぐ戻らなくてはいけないの、彼も仕事の途中だし、看護師だから」

小さいながらも嘘をついた。誠実でない人に誠実で返す必要はない。そう思った。

由美はハンドバックを開き封筒を取り出して「法律事務所に預けられた裕司の遺言(ゆいごん)書の写しです」

受け取って開披し、一読して驚いた。

「二、三確認させて」

「はい、正直にお答えします」

「この遺言(いごん)の作成日時つて離婚届受理日の後ということではない？」

「ええ、それ以後亡くなるまで別の遺言書は作成していないと弁護士先生が言っていました。この先生、彼の父親からずっと会社顧問として関与していたようです」

「お義父(とう)さんはオーナー社長だったものね、

何の会社か知らないけど」

「去年倒産しましたけど不動産業でした、それを十
年前に彼が継いで」

「つまり裕司が潰したというわけね、納得だわ、それなら、彼に会社経営は無理。それからだね、致命的な疾病が見つかり、最近離婚も成立と。由美さんが社長になるべきだったわね、案外清濁併せ呑めるタイプらしいから。ところが有限責任だから会社の負債を社長の個人資産で弁済する必要がない。つまり相続させる財産が残っていた、ということね」

「邸宅はわたしに遺贈(いぞう)となってるんですけど土地建物の評価が高いのでかかってくる税金に
応えるお金がないの」

「物納したのでは元も子もないしね」

「やっぱりなんでも知って人なんですわ。どうでしょう、こんな身勝手なお頼みで恐縮なんですわ、お頼みするしか」

「いいわよ、わたしへの五千万なにかしの遺贈は拒絶してあげる。あとは弁護士が何とかしてくれるって、そういうことでしょ、何か魔物たちの世界ね、いずれ

にしても」

「そう思うでしょうけど現金を手にしたら納税をして残ったお金は薫さんにきつとお返ししますから」
耐えてきたものが爆発しそうな気がした。怒らなければずつと薄汚いやり取りに付き合わされる。それだけは我慢が出来ない。そう思った。

「人を馬鹿にするのもいい加減にきなさい、由美さん。要らないつたら要らないのよ、そんなお金。もらっても難病で余命いくばくもない私には使い途がないわよ、寄付する以外にはね。折角半世紀もかけて自分のアイデンティティを取り戻したっていうのに、これ以上門地だ、地位だ、財産だ、金だつて垢に塗れた話で邪魔をしないで！」

「すみません」と萎(しお)れる由美を見て、感情に走りすぎたかなと少しく悔いた。

「野田君行こう、下りの車椅子大変だ、わるいね」
本当に気が遠くなるほど長い間、目の前の由美には敗北感を抱いていた、門地でも学歴でも容姿でも、当時私に直接裕司に対する愛情では負けませんと胸をはった気概でもだ。それらが瓦解する不気味な音が聞

こえた。離婚後も見舞を重ね、臨終の日もそばに居たというのも美談ではなさそうな、そんな気がしてきた。

「薫さん、ありがとうございました」

由美がこれ以上は無理というくらい身を縮めて頭を下げた。不思議なことに「可哀そうな気もした。何があつて富裕なはずの実家に頼れないのかは知らないが基本にお嬢様でしかないのだからと」。

「遺贈拒絶の証明が要るなら書類作つてこども宛まで来てね。コーヒーとかココアぐらいなら出せるよ」
車椅子で野田が押しているので由美の姿は見えない。聞こえるようにと大声で言った。

野田が後ろを確認したらしく「まだ頭下げてる」と柔らかな声で教えてくれた。

「薫さん、奥平さんのいる病院に寄るって話、どうします？」

野田が探るような調子で言った。もらわないと嫌になるほど先を読む能力に長けている。

「やめるわ、これ以上世俗的な詳しい事情を知って諸々がっかりしたくない。彼の逝去を確認したかった。そもそも目的は達したし」

「はい、そういうことにして早く帰りましょう」

「おとなだねえ、野田君は。涙が出そう」

「そうそう、一つ訊いていいかな。薫さんが遺贈を受けないとどうして彼女の手に現金の遺産が戻るという理屈になるの？ もう奥さんじゃないわけだし」

「そうか、はい。戻るじゃなくて戻せる可能性がある」ということなの。裕司と私の歳はほぼ同じだから祖母、父母はもう故人、由美によると子どもはガンバツテも出来なかつたそうだから直系卑属も無し、裕司は一人っ子だから兄弟姉妹も無し、配偶者のままだつたら由美は唯一の法定相続人で基本的に遺産は彼女の手に入つたのよ、由美と離婚はしたけれど裕司は邸宅を遺贈で彼女の許にと、こういうわけね。理由は詮索しないけどお金を私に遺贈した。でもわたしには受贈する義務はないので拒否するとお金は宙に浮くわね。由美が何もしないでいると国庫に入ってしまう恐れがあるわ。弁護士が私に交渉して拒絶してもらえれば可能性ありとしたのは、たぶん家裁に請求して由美を特別縁故者と認められるのが一つ。あとは離婚そのものの無効原因を創りあげることかな、ち

よつと小細工が過ぎるけど。あ、野田君、私法律に長い間ご無沙汰してるから鵜呑みにしないでね。これ、車中の暇つぶしの的に聞いて

「はい。面白い暇つぶしでした。じゃあー」

「え？ まだあるの」

「お腹空いた」

「ごめん。どっかこの先で見つけて御馳走するから、ふだん食べたなくても実現できてないものってないの？」

野田が笑みを浮かべながら小首を傾げた後でポンとハンドルを叩いた。

「ウナギ！」

「うん、行こう早く探して」

そう言いながら野田の左肩を叩いてフツと思いつ出した。あの日、新沼副苑長に出してもらった鰻重は結局誰が食べたのだろうか。